

急性期に強い心血管異常を認めなかった 川崎病患児の退院後の受診および健康状況。 (分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究)

菌部友良、土屋恵司、片岡 正、
麻生誠二郎、今田義夫、大川澄男、与田仁志

要約：急性期に強い心血管異常を示さなかった910例の、退院後の当施設への受診状況とその際の健康状況を調査した。約10%の症例は発症1年半以後受診しなくなるが、全体として約半数以上は指示通りに、約3年毎の定期検診を受けていた。それらの例に新たな冠動脈病変や有意の弁疾患等の発生は認められなかった。60例につき血中脂肪プロフィールを調査したが、冠動脈瘤例60例と比較しても有意差なく、正常児とほぼ同様であった。今後も川崎病の予後解明のために、定期検診体制の拡充が望まれる。

見出し語：川崎病、川崎病の予後、冠動脈障害、高脂血症

目的：川崎病は原因が不明であるだけでなく、その予後もまだ不明な点が多い。そのためこの研究班においても、長期サーベイランスが進行中である。冠動脈瘤の存在する例はもとより、急性期に心血管病変がはっきりとは認められない例、あるいは心血管病変が軽度の例においても、予後を明らかにする必要がある。予後を知る上でも専門施設において、これらの患児の定期的診察（観察）が欠かせない。しかし、自覚症状が乏しいので、定期診察の必要性を説いても、来院しない事も多い。今回当施設において、どの程度の率で、退院後の定期検診を受けているかを明らかにする。又定期健診の結果を検討して、健康状況を明らかに

する。

対象と方法：対象は当科で断層心エコー検査体制の整った1980年から1989年までに当院に入院し、断層心エコー検査で冠動脈径正常、あるいは拡大（最大内径4mm未満）を示した910例である。これらの例の定期健診は当初間隔が短かったが、最近では退院1年以後の健診は約3年おきに行なうように指示した。定期健診受診日の調査は1991年10月に施行し、発症から最終検診日迄の期間を調査した。

定期健診として、一般診察と心臓関係の検査を施行した。心電図検査は5歳未満は安静時心電図、

日赤医療センター小児科、新生児未熟児科

JAPANESE RED CROSS MEDICAL CENTER

5歳以上はその場飛びあるいはなわとびによる負荷心電図を施行し、断層心エコー検査で冠動脈内径、心機能、有意の弁逆流の有無を検査した。冠動脈障害の疑わしい検査所見のときはトレッドミル検査や、核医学検査を施行した。

一般検査以外では一部の例に血算と生化学検査（特に高脂血症の有無）を施行した。血中脂肪プロフィール（総コレステロール、HDL-コレステロール、動脈硬化指数、中性脂肪）に関しては、当科で治療中の冠動脈瘤症例60例の値と比較した。

結果：2年毎に分けた受診状況を表1に示した。6ヶ月未満で来院しなくなるのが約3%で、約10%が1年半以後に来院していなかった。全体としてみると約半数以上が指示どおりに定期健診を受けていた。

受診した例の中で新たに冠動脈障害が出現したり、駆出率60%以下に心機能が低下したり、ドップラー検査で大動脈弁逆流や心房の上壁まで達するような有意の僧帽弁逆流などが出現したものはなかった。又、運動負荷検査で有意な虚血性変化を示したものもなかった。

血中脂肪プロフィールの値を表2に示すが、これらの患児と冠動脈瘤症例との間に検査年齢に多少の差のあるものの、各項目に有意差無く、正常児とほぼ同様と思われた。

考案：川崎病は原因、予後ともに不明であるので、退院後も定期健診が大切である。しかし冠動脈瘤症例を含め、急性期以後は自覚症状に乏しいので、学校を欠席したくないなどで、来院しなくなることが多いとの印象がある。そこで、今回調査をし

てみると、約半数以上のものが、ほぼ指示どおりに定期健診を受けていることが判明した。今回は調査できなかったが、来院しなかったものの中にも、学校の指示した医療施設や転居先を含めた住居近くの医療施設等で定期健診を受けているものもあるはずで、それを合せるとかなりの高率になると思われた。ただし、今回の症例以前の年長症例となると、転居、就職、疾患の説明などのことで、受診率は低いものと思われる。

今回の症例の中で、急性期以後に川崎病によると思われる新たな心血管障害は発生していなかった。昨年までの厚生省心身障害研究に於いても、ほぼ同様な結果が報告されており、急性期に重い心血管障害を示さなかった川崎病の短、中期的予後は良好のようである。長期的にみると冠動脈の動脈硬化の早期発症が懸念されている。そのため動脈硬化の危険因子である高脂血症が川崎病既往例に存在するかを検討したところ、今回の血中脂肪プロフィールの検討では、冠動脈瘤症例と非冠動脈瘤症例ともに、ほぼ正常者と同様のパターンを示すことが判明した。

今後川崎病の予後を解明するためにも、定期健診の必要性などいわゆる“患者教育”と患者が受けやすい定期健診の確立が望まれる。

川崎病退院後の受診状況（非冠動脈瘤症例）

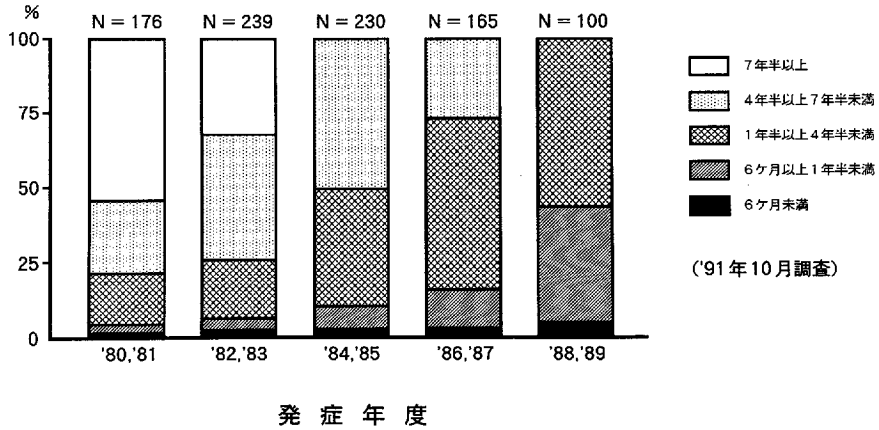


表 1

川崎病症例の血中脂肪プロフィール

冠動脈障害	人数	月齢	検査月齢	総 コレステロール	HDL コレステロール	動脈硬化指数	中性脂肪
冠動脈瘤群	60	22 + 22 (2-131)	96 + 46 (20-219)	116 + 24 (116-244)	54 + 11 (33-88)	2.17 + 0.62 (0.64-3.78)	92 + 46 (31-228)
非冠動脈瘤群	60	24 + 25 (3-160)	116 + 56 (16-229)	172 + 29 (95-239)	58 + 15 (31-99)	2.13 + 0.80 (0.92-4.66)	99 + 61 (31-339)
(有意差)		P = 0.65	P = 0.04	P = 0.24	P = 0.11	P = 0.77	P = 0.50

表 2



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:急性期に強い心血管異常を示さなかった 910 例の、退院後の当施設への受診状況と
その際の健康状況を調査した。約 10%の症例は発症 1 年半以後受診しなくなるが、全体と
して約半数以上は指示どおりに、約 3 年毎の定期検診を受けていた。それらの例に新たな
冠動脈病変や有意の弁疾患等の発生は認められなかった。60 例につき血中脂肪プロフィ
ールを調査したが、冠動脈瘤例 60 例と比較しても有意差なく、正常児とほぼ同様であっ
た。今後も川崎病の予後解明のために、定期検診体制の拡充が望まれる。